
メイドさんの出番です!!

紫乃 華陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メイドさんの出番です！！

【Zマーク】

Z8818Y

【作者名】

紫乃 華陽

【あらすじ】

パン屋の娘から、急遽噂の”白い伯爵”の元で働く事となつた楓。そこには、「金目狙い」などという言葉は無くて平和であった。だが、ある日の事。楓がすっかりメイドの生活に慣れて来た頃に、突然伯爵が誘拐されてしまった。

いつもの根気と気合で伯爵を助けに行くと、いつのだが・・・。

メイドライフの幕開け（前書き）

少々コメディ方向へと書き換えました。
台詞が多い所もありますが、
どうぞ広い心で見てやって下さい。

メイドライフの幕開け

とある街の屋敷には、街で噂の”白い伯爵”が居たそうだ。その伯爵は未婚のため、やはり女性陣には財産を狙つて働きに来る者も少なくはない。そこでその伯爵は自ら雇用するようにし、体力、知力、忍耐力のある女性を選んだそうだ。

最近は女性、というよりは少し若い女子を雇用したらしい。名前は小泉楓。^{こいずみ かえで} 出身も育ちもこの街であり、生まれ持つての体力がある。パン屋の娘からいきなりメイドにならないかとスカウトされた時は、彼女も断ろうと思っていたが親に押し切られ、噂の”白い伯爵”的屋敷の前で今現在佇んでいたのだ。

確かにパン屋よりは給料も良いとは思うが、面接も無しにメイドにならないかと言われても戸惑うのは当然である。だからと言って、折角の誘いを断るのも少し悪いと思い、本人も決意したらしい。大きな門の右側の呼び鈴を鳴らすと、屋敷の中からは若い執事とメイド長らしき人物が現れた。一人とも二十代後半から三十代程度に見える。二人は楓の前に来るとにこり微笑み、「小泉楓さんですね？お待ちしておりました。」と執事の方が言った。

「私は篠田と申します。執事長を勤めております、よろしくお願ひ致します。」

「雪野です。メイド長を勤めております、これからよろしくお願ひしますね。」

軽い自己紹介をして一人は楓を中心へと案内した。

楓は、庭に綺麗に咲き誇っている薔薇を見渡していた。ここが一般庶民とは違う所などと考えていた。その間に、無駄に大きい扉の前に到着していたのだ。

あまりの大きさに楓は目をぱちくりさせる。そんな楓を雪野は可愛いものを見るようにふふと笑いながら見ていた。

家の中も今までに見た事が無いような広さで、ここを伯爵一人が支配していると思うとどれだけ偉大だかを楓は思い知った。そのため、伯爵への挨拶へ行く途中で左右に顔を動かしてばかりいた。

「（）主人様のお部屋はずつと奥にあります。後で雪野さんが他の部屋について教えてくれると思いますので、なるべく早く慣れてくれればと思つております。」

「は、はい・・・。」

自分にとつては慣れない広さだったために、心底不安も抱いていた。そんな楓の背中を雪野は軽くぽんぽんと叩いた。

「ゴッスマザー・・・！」

そう言いたくなつたのは抑え、楓は一人で感動していた。この頃から楓にとって雪野は”神のような母親”になつたのであつた。
「ご主人様、楓さんをお連れしました。」

さつきまでの緊張のほぐれはまたピンと張り、中からの返事が来るのが少し怖かつた。何故なら楓の脳内では、『伯爵＝眞面目で怖い』というイメージがあつたからである。だが、中からの返事は思つたよりも明るく、少し幼い高い声だつた。

「どうぞ、入つて下さい。」

その声を聞いた楓はホッとした。

ドアが開いて、視界に現れたのはちゃんとした青年。ブロンドの髪に白いスーツを着ていて、まるで天使を思わせるような・・・童顔だった。（恐らくハーフ。）

そんな伯爵を見た楓は驚いた。立つた時同じ年位の身長ではあるのだが、顔が幼い声も幼い。イメージとは全く違つてはいたものの、全く逆の存在だつたのだ。

「初めてまして、私は神宮寺琥珀と申します。今日からよろしく、楓さん。」

そう言つてにっこり笑つた。とても驚いていた楓だが、とりあえずお堅い挨拶をして琥珀の部屋から出た。

「どうでした？伯爵は。とても可愛らしい人だつたでしょ？」

「 じゅ、 雪野・・・。」

「あら失礼。」反省の色は無く雪野はクスクスと笑っていたのだ。

挨拶した後は、篠田が言つたように雪野が部屋の案内をした。

部屋はアパート一部屋の一倍くらいで、タンスやクロゼット、バスタブにベッド、机などと必需品が揃つていて一人分の部屋にしては快適だつた。

「 じゅ が貴女の部屋です。 今日のお仕事は、貴女の部屋を整理する事から始めましょ う。」

「 解りました。」

「 部屋にあるものは好きに使つていですからね。」

と言い、雪野は楓の部屋から出て行き、他のメイド達に指示を出していた。

「 さて、始めますか・・・。」

まずは、藍色の制服（メイド服）を着て、エプロンを着けた。エプロンは現代向けなのか、フリルが付いていて可愛らしいデザインだつた。制服は古風である。カチューシャを着けたら、まずは鞄に入つている寝巻きや下着、念のためにある普段着をタンスの中に入れだ。クロゼットにはコートと今日来ていた上着と鞄を入れた。

机には、メイドのためのマニコアル本と羽ペンが乗つていた。引き出しには日記帳があり、『 じゅ に本日あつた事を記しておく事』と書いてあつた。大分丁寧である。

部屋も意外と小綺麗で、掃除なんてたまにすればいい位の綺麗さであった。

やる事を無くした楓は、雪野の元へ行き何かする事がないか尋ねた。

「 そうですね ・・・。 では、図書室と資料室に本を運んでいただ こつかしゅ。」

きちんとした初仕事に、楓はやる気を見せた。

「 任せて下さい ・・・。 で、その本は何処にあるのですか?」

すると雪野は「ここですわ。」といい、ダンボールに詰められていた新書を楓の前へ運んでいった。

「此方は図書室で、此方が資料室への本です。少しずつでいいので運んでいただけないかしら?」「

その本の山を見た楓はたらりと汗を流したが、初仕事で、しかも力仕事なので気合を入れ直した。

「分かりました。頑張ります!!」

そう言うと雪野は心配顔から笑顔になり、「よろしくね。」と部屋を後にした。

「うーん・・・十冊ずつ持つてけば平氣かな・・・。」

両方百冊、計一百冊程ある。力仕事が得意な楓だが、流石に多量だ。持てる分だけ持つて行き、図書室の本は全て片付いた。そして、資料室へ運んでいく途中だった。

「手伝いましょうか?」

後ろから声がした。横にひょこっと顔を覗かせたのは、琥珀だった。「伯爵!? だ、大丈夫です。力仕事は得意なので。それに伯爵に持たせる訳にはいきません・・・。」

と遠慮する楓に対し、

「伯爵じやなかつたらやらせてくれるの?」笑いながら、楓の後に続いた。いつの間にか敬語じやなくなっていた。

「え、それは・・・あ、あああ!!」

バランスを倒してしまったのか、後ろに転倒しそうだつた。それを、丁度後ろにいた琥珀が支えたのだ。

「大丈夫? ・・・やつぱり手伝つた方が良かつたんじや・・・?」

と笑つた。

「ほ、本当に大丈夫ですか!..」

と言つたが、琥珀は言う事を聞かずに半分以上の新書を持った。

「伯爵、私が雪野さんに怒られますから・・・!」

「平気だよ。僕が言つておくから。」

何を言つても手伝つ氣でいるらしいので、楓は諦めてしまった。

資料室は掃除をしていないのか、埃っぽくあまり綺麗とは言えなかつた。

「ここ」、掃除をされていないんですね・・・。大丈夫なんですか？」

「いいんだ。ここは結構プライバシーに関わる場所だから、あんまり人を入れたくないんだ。」

「そうなんですか・・・。」

二人が新書を入れ終えた時、琥珀が言った。

「ここには、今まででは僕以外に篠田さんと雪野さんしか入れた事ないんだけど、君は雪野さんに頼まれたから特別だね。」

「そ、そなんですか？！」

「うん。だから、今度からはここに入つて来ていいからね。後、掃除も頼もうかな。」そういうて、また笑顔を見せた。

「・・・いいんですか、本当に・・・。」

「ああ。あんまり弄らなければね。じゃ、僕はここで調べたい物があるから。」

「あ、はい。失礼しました。」

楓は納得がいかなかつた。琥珀と雪野と篠田しか入れた事の無い資料室に、何故自分だけ入れたのかが疑問に思つた。だが、何もわからうないのでとりあえず、その問題は放置した。

その事に深入りするのもいけない気がしたため、他はもう聞かない事にした。

「雪野さん。終わりました。」

「早いですね。するでもしましたか？」

その笑顔が恐ろしい。

「い、いいえ、色々やり方を考えながらやつていたもので・・・。」
と楓は苦笑するしかなかつた。

流石に、伯爵に手伝つてもらつたなどと言つ訳にもいかない。本当は処罰をうけなければいけないはずだったのが、思わぬ結果になつてしまつた事を楓はそこで後悔した。

「後はもう無いと思います。他のメイド達にもう色々とやっていたので、後は皆さんと一緒に食堂へ行って下さい。」

「分かりました。」

食堂は長い廊下を渡つた先にあり、雇われているメイドは少數なのに食堂は広いのだ。楓が恐る恐る中に入つてみると、中には十五人中八人程のメイドがもう先に座つていた。

「あ！新人さんだ！」

一番最初に反応したのは身長の小さいメイドだった。

「楓ちゃんって言うんだよね？私は優奈^{ゆな}っていうの。よろしくね。」

と笑つて見せた。

「よ、よろしく・・・。」

「こら、新人さんを困らせちゃ駄目でしょ？」

次に近づいてきたのは眼鏡の三つ編みの女の子だった。

「私は咲^{さき}。ごめんね、この子がいきなり・・・。」

「ううん、大丈夫。よろしくね。」

二人が近づいてきたからか、他のメイド達もわんやわんやと集まつてきた。

明るい性格からしつかりした性格までのメイド達が自己紹介を始めたのだ。先程の優奈は十六で、咲は十八。大体は楓と近い年の子ばかりであった。

「ふう、終わつた・・・。ん？」

「何々？一体何事？」

「新人だつてさ。」

最後の三人が入つてくると、楓の周りを囲んでいたメイド達は急いで自分の席へ戻つた。

楓は何が何だかわからない様子だったが、とりあえずその三人にも挨拶をした。

「楓です。今日からここで働く事になりました。よろしくお願ひします。」

田の前にいた三人は、一瞬驚いたもののすぐに笑顔になり、

「よろしく。私は副メイド長の七海。」

「私はメイドの中の幹部生つて所かな？ 実花だよ。よろしくね。」

「同じく、幹部生の歩美です。よろしく。」

食事を食べ始め、三人と慣れ親しんだ後は普通に会話をしていた。

「へえ、メイドにも位があるんだね。」

「そりや、メイド長とかいつかは辞めないといけないからね。その後誰がなる？ ってなつたら困るでしょ。だから、こういう風に副メイド長、メイドの幹部みたいにしてるの。」

「だから、皆わざわざ離れたんだ。」

「そういう事。でも、普通に話していいからね。分からぬ事があつたら何でも聞いてね？」

「ちょっと図々しいかもしれないけど、そうさせてもうひつね。」

こうして、食事の時間は楽しく過ぎたのだとこう。

それぞれ、自室に戻ったメイド達。楓はお湯の入ったバスタブに身を沈めながらメイド達の名前を覚えていた。

「結構覚えるの大変だな・・・。慣れれば大丈夫だと思つけど。」

最初に来た時の不安は嘘だったのかと思つ程に、次の日を楽しみにしていた。

入浴を終え、寝巻きに着替えた後は記録帳（日記帳）に出来事を書いて寝た。

『メイドライフの幕開け』といつ見出しから始めて・・・。

メイドライフの幕開け（後書き）

少し誤字を直しました。誤字、脱字があれば言つてもういふと幸いです。

皆が鬼に見えるのは、私だけでしょうか・・・？

「楓一、二つちあ願い！」

「はいはい、只今——！！」

楓ちゃん、そつち終

が足りなくて。」

分かりました！！これが絶対にすぐに行きますから！！

幹から離れて、とこの調子であちこちに向かって机を見て、他のスベト達も驚いていた。実は、本日の最初の仕事により、幹部や副メイド長に見込まれたのだ。楓は女にしては力があるという事でこうなつてしまつたと言つても良いだろう。

「そりや、朝あんな事があつたんだから当然でしょいね・・・あれ
は伝説よ。」

楓のメイド仲間である優奈と咲が忙しそうな楓を見て言つ。咲の言つ伝説とは、先程言ったように本日の最初の仕事とも言える事だ。

朝メイト達が朝飯を食へ終れた時の事だった

*

「食器、どんどん持ってきて。」

二〇一

食器洗いが係のメイドに頼まれて食後の食器を運んでいるのは、十
五人中三人のメイド達だった。

十五人分の食器を分けて持つていけば問題はないのだが、一人の食器を持ったメイドが躓いてしまい、そのまま転倒・・・

「うわあ……。うと……おひとくと……。」

のつもりが近くにいた楓が皿を両手でキャッチし、転倒しそうにな

つたメイドを足で支えてセーフ。

当然、周りからは「おおー」と声を揃えてそれと同時に拍手が巻き起こった。その後は皿も洗えて、転倒を免れたメイドは怪我無く全て無事に終わった。

*

このような出来事があつたために副メイド長に見込まれ、今に至るわけである。誰にも真似が出来るわけではないので、その力を仕事に生かせないかと次々と仕事をやらせてていると言ひ訳だ。この出来事はその夜にメイド達の記録帳に刻まれるだろう・・・。

「えーと、次は庭の掃除か・・・はあ・・・。」

溜め息を吐きながらも仕事は仕事なので、楓は庭に向かった。庭の掃除は執事の篠田から教えてもらうために行くのだという。

「篠田さん?」

「楓さん。お疲れ様です。」

「あ、お早うござります。」

篠田も丁度今来ていたらしく、物置小屋から出て來た。どうやら中の騒動を知っていたらしい。

「ではまず、掃き掃除からですね。今の時期だと落ち葉がそこいらに落ちているので、それを掃いて下さい。範囲は庭内だけでいいので。終わったら、私は部屋にいますので来て下さいね。」

「解りました。」

篠田は笑顔で室内に入つてこき、いざ始めようと思つた楓はやる前からどつと疲れていた。

屋敷の掃除もあつたが、まず庭内だけと言われても、庭内が広すぎるのだ。庶民の庭の何倍もある。始めたときはじつくり見ていなかつたが、屋敷から出た時は門が遠く見えた。ここを一人で掃除をしろという篠田を鬼だと思い始めた楓であつた。

「気楽にやってけばいいかな・・・。」

そう言いながら、屋敷の近くにある落ち葉から掃いていった。

太陽はまだ南より少し左の位置にある。雲ひとつ無い晴天だった。空を見ながらぼんやりしていた楓を、伯爵である琥珀は窓から顔を出して面白がって見ていた。

「おサボリはいけませんよー。」

笑いながらそう言う琥珀の声にはつとして、楓の思考は現実に戻る。「すみません、暖かくてついつい……。」

はにかみながら顔を下に向けて掃き掃除を続行した。

それを見ると琥珀はますます面白がってクスクス笑っていた。それに気付いたのか楓は怪訝そうな顔をして琥珀を睨んだ。

「何か可笑しいですか？」

そんな顔をされてもにこにこしながら自分を見ている琥珀に少し苛立つていた。

「君の反応が面白くてね……ふふつ」

どうやら笑いを堪えているらしい。楓はそんな伯爵に知らん顔をしながら掃き掃除を続けた。

いつの間にか半分以上まで掃除が進み、後少しで終わりそうだった。楓は掃いていつたところまでを見て「よし。」といい、伯爵の部屋の窓の方を見ると伯爵はまだ顔を覗かせていた。それも笑顔で。「何なんですかさつきから……。お仕事はなさらなくて平氣なんですか？」

「君が掃いている間に全部終わらせた。君ももうすぐ終わりそうだね。」

イライラが顔に出ている楓をあんまりにも面白そうに見ているために、楓も怒るどころか呆れてしまった。

「何がそんなに面白いのかしら……。人の顔を見て笑うなんて失礼な人。」とボソボソと言っていた。

「何か言つた？」

「いいえ、何でも。」

屋敷内の掃除で疲れている楓にとつて庭掃除は結構な休憩であった

が、琥珀と話す事でまた疲れが溜まつていったのだ。体力は人並み外れではいるため、まだ少し仕事が出来そうであつたがそろそろ限界に近かつた。体力、精神両方ともどつと疲れて休みたいとは思つていただが、こんな事では辞めさせられてしまつと思つて少しつらうと内心思つっていた。

掃き掃除がやつとの事で終わつた所でもう既に楓はへとへとなつていた。

伯爵は窓から姿を消し、安心してその場で眠つてしまつた。

「やれやれ・・・。」

出かけようとしていた琥珀が羽織つていた肩掛けを楓の肩に掛けた。後ろにいた篠田は微笑み、

「琥珀様は優しいですね。」と言つた。

その時、琥珀は内側の胸ポケットに入れていた紙を起ししさないよう楓に持たせた。

「そういう風に見える?」

笑いながら言う琥珀に、篠田は苦笑した。「行きましょうか。」といい、門の近くでそのまま寝かせた。

「・・・ちゃん・・・ぢぢちゃん・・・楓ちゃん、起きて。風邪引いちやうよ?」「んん・・・?」「んん・・・?」「んん・・・?」

楓が目を覚ますと、目の前には幹部の実花が心配そうな顔をして見ていた。

「実花ちゃん・・・。あれ、私・・・?」

周囲を見渡す途中、手に持つていた手紙に気がついた。

「とりあえず部屋に戻ろう? 曇つてきたし・・・。」

「うん。」

室内に入つて見ると朝忙しかつたメイド達の姿は無かつた。恐らく、

各部屋の掃除に向かつたのだろう。

「その手紙は何？」

「わかんない・・・。起きたら持つてて・・・。」

四つ折りになつていた手紙を広げて読んだ。すると、楓の顔が青くなつていつた。

「どうしたの？・・・見せて。」

手紙を持っていた手には力が無くすぐに取る事が出来た。元に戻ろうとしていた手紙をきちんと広げて、声に出して読み始めた。

「何々・・・？』この度は庭掃除の後眠つてしまい、そのまま他の仕事を放棄していた楓さんに処罰を与える事とします。食事が終わつたら私の所へ連れて来て下さい。琥珀』・・・うわあお・・・。」

楓は声にならない悲鳴を上げていた。そして絶望感に陥り、その後食事もまともに食べられなかつたと言つ。

流石に心配になつた咲達は懸命に楓を励ましていた。

「大丈夫だよ、楓ちゃん。初めてなんだから失敗も当たり前だし、ね？」

「ううん・・・。初めてだからちゃんと出来ないといけないの・・・。だつて、ここに来てすぐに処罰を受けるなんて・・・しかも居眠りで仕事放棄つていう理由で・・・。」

生氣も無く、口から魂が出ているようにも見えていた。そんな楓に、副メイド長の七海は溜め息を吐いた。

「楓、失敗なんて誰にでもあるよ。それに初めて来た時に処罰を受けたのはあんただけじゃないんだからさ。そんなに気を落とさないで。」

「・・・すみません。」

他のメイド達にも励まされて、もう落ち込むのも失礼だと思い始めた頃には琥珀の仕事部屋へと向かつていた。

大丈夫、大丈夫と自分に言い聞かせてノックをし、「どうぞ。」という声が聞こえた後に扉を開けた。中には琥珀が座つていて、楓を待ち構えていたようだつた。

「やあ。よく眠れた？」

「ええ、まあ。おかげさまで・・・。」

やつぱりこの人といふとイラマするな・・・。そう思い、目を

そらして次の発言を待っていた。

「で、君の処罰なんだけれどね・・・。」

そこまで聞いた楓は、自分の体が大きな鼓動のせいで揺れている事に気づいた。白い伯爵、琥珀の屋敷で働き始めてから初めての処罰である。とても緊張していたのだ。

「君には明日の買い物に付き合つてもらおうかなと思つて。」あまりにも処罰とは言えない処罰だったので、「ふえ?」という間抜けな奇声を漏らして啞然とする。そして、思い切りホッとした。処罰は伯爵が恐ろしいイメージがあつたように、もつと酷なイメージがあつたからである。だが琥珀の事なので、何かあるに違いないと油断はしないように用心した。

「明日の午後一時に行くんだ。わかつたね?」

「承知致しました。」

「うん。部屋に戻つていよい。」

笑顔で言う琥珀は何だか楓を追い出しているようにも聞こえた。「失礼しました。」とやはり怪訝そうな顔をしながら伯爵の部屋を出る。

「買い物か・・・。何かあるのかな?」

“買い物”と聞いても別に普通な気がしてならなかつた。

処罰が買い物なんて聞いた事が無い、そういうながら部屋に向かつたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8818y/>

メイドさんの出番です!!

2011年11月27日17時38分発行